Macbeth に於る「時間」の相対論的考察

友　清　蓉　子

古くはギリシアの昔から，中世を経て，アインシュタインに至るまで，時間の問題は人間の心を捉えて離さなかった。

アインシュタインが物理学の分野で，ニュートンが認めた「絶対時間」に対して，個々に流れる相対的な「固有時間」を考えた時，時間が伸びたり縮んだりする事が幻ではなくて，物理的真実であることが立証されるようになった。

Macbeth に於て，Shakespeare は，周到に時間を考え，芸術作品として破綻なく，これを扱っている。そこには，所謂「絶対時間」はなく，それぞれの登場人物の生き方に則した「固有時間」があるだけである。

物理学的真理が，人間の頭脳と心から生まれた一つの世界観である限り，文学でのそれと似た様相をみせたとしても驚くにはあたらない。

Macbeth に，「固有時間」の他に，通常の「社会的時間」と，作者としての「Shakespeare の時間」があるのは当然である。

複数の人間が集まれば，時計に刻まれる，約束事としての「社会的時間」は止むを得ず必要となる。こちらは，我々の普段の社会生活上の時間とあまり違わないから，今は論の外に置きたい。

次に，作者としての「Shakespeare の時間」についても，原話の Macbeth が17年間の王位を保っていたのを Shakespeare が9日間の物語に圧縮したことを指摘するにとどめたい。

この小論で考察しようとするのは，登場人物の性格と内面に織り込まれたその人物に備った「固有時間」についてである。

Macbeth に於る「固有時間」を大別して，1. Three Witches 2. Macbeth, Lady Macbeth 3. Duncan, Banquo, Malcolm, Macduff, Ross, Old Man, Doctor 4. King Edward, の4種とし，これらを話の筋を追いつつ，そのそれぞれについて，考察を試みたい。

雷鳴が轟き，夕闇の迫る荒野に Three Witches は現われる。これから破滅に導びこうと狙いをつけた Macbeth を待ち伏せるためである。Macbeth が Banquo と連れだってそこを通りかかる直前，三人は声を揃えて呪文を唱える。

... the charm's wound up. (I. iii. 37)

Witches に出会う前の Macbeth を，我々は直接には知らない。Duncan 王に対してなされる反乱軍との戦の報告の中でその勇姿が間接的に知らされるだけである。それでもその姿は，主君に忠実な困難を物ともせず戦う，'Bellona's bridegroom' (I. ii. 54) そのままであった。

'Fortune' を 'disdain' (I. ii. 17) して勝敗いずれとも分け難かった戦を勝ちとった，その Macbeth が帰路の途中，宮殿に近い荒野で発する第一声が，'So foul and fair a day I have not seen.' (I. iii. 38) であった。天候の話であるとも，戦の状況を想い出しているとも考えられているが，Witches の呪文である 'Fair is foul, and foul is fair' (I. i. 11) に，それと知らずに正確に反応を示めしている。直前に結ばれた Witches の 'charm' (37) の圏内に入り込んだ証でもあろうか。

その異様な姿に驚く Macbeth と Banquo を前に，Witches はMacbeth に呼びかける。

First Witch. All hail, Macbeth! hail to thee,

thane of Glamis!
Sec. Witch. ... thane of Cawdor!
Third Witch. ... Macbeth, that shalt
be king hereafter! (I. iii. 49-50)

Banquo はこれを受けてすぐに，'thane of Glamis' を 'present grace', 'thane of Cawdor' を 'great prediction Of noble having', そして，'king hereafter' を 'royal hope' と言い換えている。Witches は Macbeth に，現在と，近い未来と，更らにその先の未来の呼称で挨拶したという訳である。家督を相続して，Macbeth は現在 'thane of Glamis' である。例え現在の事実であっても見も知らぬ者からそれを言い当てられるのは，Macbeth ならずとも意外な気持のするものであるが，Macbeth の反応は，それ以上のものであった。

無意識のうちに Witches の 'charm' に反応した（させられた）Macbeth であったからであろうか，Witches の三様の呼びかけに，一緒にいる Banquo を不思議がらせるほどに驚き (I. iii. 51)，陶然とした様子をみせる(57)。続いて同様に予言を受けても，平然としている Banquo の反応とは対照的であった。

Witches が消えるとすぐに Duncan 王からの使者が二人を出迎えて，反乱軍の主謀者のものであった 'thane of Cawdor' が，Macbeth の称号として与えられることを告げる。予言が言葉だけのものでなかったことが明らかになった。Witches が未来を見通す力を持っている事が確かになったのである。

もっとも，'thane of Cawdor' が未来の予言と受けとられるのは，Macbeth や Banquo の立場に置かれた場合であって，Witches にしてみれば，Duncan 王がその称号を Macbeth に与える事を決めたのは，Macbeth と Banquo に会う前の事であるから，それはすでに過去に属する事柄である。二つの世界の「時間」のずれは，こんな風に現われてい

る。

Macbeth に対しては明解な呼びかけをした Witches が，Banquo には，大そう曖昧な物言いをする。

First Witch. Lesser than Macbeth, and greater.
Sec. Witch. Not so happy, yet much happier.
Third Witch. Thou shalt get kings, though
thou be none: (I. iii. 65-67)

Macbeth と比較された Banquo は，'lesser' であり且つ，'greater' である。'not so happy' であり且つ，'much happier' である。'none' でありながら 'get kings' でもある。互いに相容れないものがイコールで結ばれていて，これは，'Fair is foul, and foul is fair' (I. i. 11) という Witches の呪文そのものの世界である。これから先起ころうとする事柄が，現在の二人の評価につながり，換言すれば，既に「現在」に「未来」がある。

といって，Witches の「時間」に，過去，現在，未来の区別がある訳ではない，というのが真実であろう。空中に泡のように消えた (I. iii. 78-81) Witches は，空間と時間のバリアを超えた存在であるからである。

二つ目の呼びかけが真実であることが解った今，Macbeth が三つ目の呼びかけを現実のものとして考え始めても無理からぬ事であろう。

[Aside] This supernatural soliciting
Cannot be ill, cannot be good: (I. iii. 130-131)

'soliciting' は勿論，王位への誘いである。それが 'ill' であるはずがなく，そして，'good' であるはずもない。Macbeth はここで Witches の 'charm' に意識の上でも反応し始めている。

もし 'good' であるとしたら，と考えると Macbeth は心ばかりか身体までがいつもの落ち着きを失ってしまう。髪の毛は逆立ち，心臓は早鐘

を打ち，全身に震えが走る。

... nothing is
But what is not. (I. iii. 141-142)

「在るものは，無いものばかり。」Witches の呪文，'Fair is foul, and foul is fair' は，ヴァリエイションを得て，Macbeth のものとなったのである。

今，Witches の予言は，'Present fears Are less than horrible imaginings.' (I. iii. 137-138) の台詞が示めす豊かな想像力を有する Macbeth の，その imagination を通して入り込み，Macbeth を，未来についての 'imaginings' は現在の 'fears' を圧倒し，在るものは無いもの，即ち幻影ばかり，という状態にしてしまった。

それでもまだ，Macbeth は，自分を取り戻す心の働きを完全に失った訳ではなかった。「もし，'chance (=fortune)' が自分を王にしてくれるというのなら，何も自分の手を汚す ('stir') こともあるまい」(I. iii. 143-144) と思い直すからである。続けて言う。

[Aside] Come what come may,
Time and the hour runs through the roughest day.
(I. iii. 143-147)

時間は，そこに生起する物事に全く無関心に流れ続けるものとして，Macbeth に捉えられている。その「時間」の経過に身を委ねて自らは積極的な働きかけをしない，受身の態勢でいようと，Macbeth は心を決めた。

Duncan 王の居城に戻った Macbeth と Banquo は，王から降るような讃辞を受ける。が，続いて，これを偶然と考えるには，Macbeth にとってあまりに衝撃の大きい申し出が Duncan 王からなされる。

王の長男 Malcolm を王位継承者と定めるという事，そして，この夜，王が Macbeth の館に逗留するということである。

せっかく自制心を取り戻していた Macbeth は，まるで向うから誘い込み，その機会まで与えようとする，偶然とも必然ともつかぬ力に屈して，止めようと思い直していた行為を又しても考え始めてしまう。

Macbeth は，Duncan 王の言う通り，乗馬の名手 (I. vi. 22) ではあろうが，王の来城を告げるために家路を急ぐ Macbeth に馬の拍車をかけさせたのは，王に対する彼の 'great love' (23) ではなくて，王位をものにしようと逸る気持であったのは想像に難くない。

Macbeth の館にあって，事のあらましを伝える Macbeth の手紙を読んだ Lady Macbeth の反応は，疑いや迷い，ためらいを微塵もみせず，砂地に水が通る素速さであった。Witches の約束する王位を得るためには，障害となりそうな夫の性格を考え，不足を補うために 'spirits' (I. v. 41) に祈って自分を変えることを願う。Duncan 王逗留の報を受けると，その夜の決行を思って，速やかにその時の来る事を夜に祈りさえする。Macbeth の手紙は Lady Macbeth を，「現在」から一足跳びに「未来」へと運んだのである。('Thy letters have transported me beyond This ignorant present, and I feel now the future in the instant.' (I. v. 57-59))

帰館した Macbeth は，Lady Macbeth と言葉少なに話を交わす。Macbeth の，事を為そうとする思いは，彼の表情に現われ，それはまるで，'book where men May read strange matters' (I. vi. 63-64) のようでさえあった。

一人になると，Macbeth は，王殺害の是非と，その先に待ち受けているであろう事どもを考える。現実よりもずっと恐しい 'imaginings' に苦しめられるよりは，それですべてが終るものなら早くやってしまった方がいい。もし行為の瞬間ですべてがうまく片づくものなら，それこそがこ

の世でやらねばならぬことなのだ。

> But here, upon this bank and shoal of time,
> We'ld jump the life to come. (I. vii. 6-7)

問題は，現世でその先どうなるかである。来世の事などどうなろうとかまわない。

有限な時を刻む現世，時計で時間が計られる場所，'shoal (=shallow)' 'bank' の先は 'the life to come' で，執え処のない広がりを持つ海のようなものと感じられている。今夜という絶好の機会を前に，逸る心と逡巡とが交錯し，Macbeth の「時間」は乱れたテンポで流れていく。

当然あるべき肉親の情愛に逆って行われた兄弟殺し，これに復讐することを課せられた甥と仇と狙われる叔父との暗闘，母と子の情愛に混じる裏切られた子供の血に対する苦い思い，といったことを描いている *Hamlet* に，次のような Queen の台詞がある。

> ... all that lives must die,
> Passing through nature to eternity. (I. ii. 72-73)

'nature' は現世，'eternity' は来世，あるいは涅槃である。'nature' という語のもつ様々な意味から来る語感の生々しさ，人間臭さは，これを現世と使って卓抜であると思う。*Hamlet* に扱われている肉親の情愛云々という主題に相応しく合致しているからである。この 'nature' に比べて，*Macbeth* の 'this bank and shoal of time' は，同じ現世でありながらひどく無機的であることに驚ろかされる。決断を迫られた Macbeth が「その時」の思いで頭をいっぱいにしているからであろうか。

現世で下るであろう審判を思って，逸る野心（'voulting ambition' (I. vii. 27)）はありながら，Macbeth は再び Duncan 王殺害を思い止まろうとする。一幕三場で思い直した時もそうであったように，Macbeth

の imagination は，彼に自らの行為の恐しさをまざまざと見せることによってその行為を抑制するように働く。そして，先のこの抑制を突き崩したのが，王位継承者の決定と，Duncan 王の Macbeth の館への逗留という，外から与えられた具体的な事柄であったように，今度も又，Macbeth の気持を変えさせる外的力が加わった。Lady Macbeth の存在のもたらしたものである。

Macbeth が事を為すための具体策を何一つ講じ得ないのに対して，Lady Macbeth は，殺害の手順を夫に教えて，Macbeth を現実的，実際的な行為の可能性を思わせる方向へと，リードしていく。終に，最後の決心をした Macbeth は言う。

> ... mock the time with fairest show:
> False face must hide what the fake heart doth know.
>
> (I. vii. 81-82)

一幕五場での Lady Macbeth の台詞，'To beguile the time, Look like the time:' (64-65) の echo のような台詞である。丁度 Witches の 'charm' が Macbeth のものになった時そうであったように，Lady Macbeth の大胆不敵な心根が Macbeth のものになった事の証であろう。

勿論これらの 'time' の意味は，「世間」，あるいは「世の人達」であるが，Macbeth がこれからしようとしている行為が，「時」の流れを変え，乱すことになるのであってみれば，「世間」に対すると同時に「時間」に対する挑戦の言葉とも受けとれる。

Duncan 王殺害を決意して王の寝所へ向かう Macbeth に現われた 'imaginings' は，血のついた短剣 (II. i. 46) であった。まるで現に今抜いたばかりの手にした短剣のようにまざまざと見える。正しくこれから自分が使おうと思っていた類の剣で，しかも空中に浮かんで Duncan 王の

寝所へ案内するかのようである。

しかしもう Macbeth の imagination は，彼の行為を阻止する力を失ってしまった。自分でなぜそんな物が見えるかを考える現実性を得たからである。

It is the bloody business which informs
Thus to mine eyes. (II. i. 48-49)

「血生臭い事ばかり考えているからそんな在りもしない物を見てしまう。」こう判断できれば，実行は目前である。そして暗殺は行われた。

殺害後，茫然自失の状態にある Macbeth の耳に聞こえたのは，'Sleep no more! Macbeth does murder sleep,' (II. ii. 35-36) と叫ぶ声であった。国王暗殺という大罪を犯したのだから，心の平和を失い，'innocent' (II. ii. 36) な眠りを享受できなくなっても，当然ではある。同時に，そこには Witches の影も見え隠れする。Macbeth に会う前，Tiger 号の船長を懲らしめようと企む Witches の台詞 (I. iii. 19-21) が，今の Macbeth にそっくり当て嵌るからである。

一日の活動の後に来る眠りは，「未来」を先取りして時の順序を狂わせた Macbeth に，その罰として禁じられたかのようでもある。

眠りを Macbeth はこの上なく良いものとして次のように定義する。

... the innocent sleep,
Sleep that knits up the ravell'd sleave of care,
The death of each day's life, sore labour's bath,
Balm of hurt minds, great nature's second course,
Chief nourisher in life's feast,— (II. ii. 36-39)

眠りを 'forbid' された Macbeth は，心配事（'care'）と，日々のつらい労働（'sore labour'）と，傷ついた心（'hurt minds'）を抱えて，この先生きていかなければならない事を知るのである。

自ら手を下して殺害した Duncan 王が死んで横たわる今，Macbeth はもう何をするのも恐しい。「大海の水を汲み尽しても朱に染む自分の両手を清めることはできない。それどころか大海原の水の色を深紅に変えるだろう」(II. ii. 60-63) と，犯した罪の深さに怯える。「ほんのちょっと水があればきれいになる」(II. ii. 67) と答える Lady Macbeth の助け無しには事後の処理すら覚束無い。

Macbeth の心にあるのは，してしまった行為の「時」を取り戻したいと思う鋭い後悔の念である。城門を叩く音に向って，'Wake Duncan with thy knocking! I would thou couldst!' (II. ii. 74) と，痛ましい叫びをあげる。

Duncan 王の死は，城門を叩いて王を起こしに来た Macduff によってほどなく発見された。騒然とする城内，しかしあれほど茫然自失していた Macbeth が再び姿を現わした時には，まるで別人のように落ち着きを取り戻している。

それでも，他人を欺こうとして嘆いてみせる台詞には，Macbeth 自身の本音が透けてみえる。

> Had I but died an hour before this chance,
> I had lived a blessed time: (II. iii. 96-97)

透けて見えるのは，悪人のそれではなくて，取り返しのつかない事をしてしまった人間が，その行為を境に自分の人生の最も良い部分を失ったと嘆く喪失感の表明である。又，これから先 Macbeth が辿ろうとしている残りの生涯を知れば，この台詞が正に彼の全人生を通しての真実を言い当てていることも解ってくる。忘れ難いドラマティックアイロニイである。

過去の出来事は，人間の記憶によって，謂わば，いつでも現在に呼び戻すことはできる。良き主君に仕え，勲も，それに伴う誉も名声も，思いの

ままであった‘blessed time’は，Macbeth にとって今や「過去」のものとなった。本来ならば Macbeth の「過去」は「現在」につながり，更らに「未来」へと伸びていくはずのものであったが，Macbeth は王を殺害した時にそれまでの‘blessed time’を断ち切った。彼の「過去」は，思い出すことだけはできても「現在」につながらず，ましてや「未来」へと伸びていくことを止めてしまったのである。それだけにいっそう彼の‘blessed time’を惜しむ気持は痛切である。

栄光に満ちた「時」を切り捨てた Macbeth は，もう始めてしまった「国王暗殺者」としての第二の生を嫌やでも歩き続けなければならない。下手人にみせかけたお附きの者を，筋書きには恐らく無かったであろうのに，釈明の暇を与えず殺し，その行き過ぎた行為を咎められる (II. iii. 113) と，以前にはみられなかった不気味なほどの落ち着きをみせる (II. iii. 114-124)。Macbeth の弁解を聞きながら気を失う Lady Macbeth が，この先気弱になっていくのに対して，Macbeth はこれから次第に悪い方へと成長してゆく兆をみせている。

Duncan 王の殺害を，周囲の者はそれぞれの思いで受けとめた。最も危険な立場にある二人の王子は，無事に亡命を果す。

事件の翌日，城の外では Old Man と Ross が，Duncan 王暗殺の夜の嵐の激しさを話題にしている。Old Man は続けて言う。

> ... 'tis unnatural
> Even like the deed that's done. (II. iv. 10)

人や物事のそれぞれに与えられている持ち時間，定められている物事の順序は，Macbeth の国王暗殺という行為によって乱された。それに感応してか，時計の示めす時間では真昼時であるにも拘らず，暗闇があたりを支配している。夜が明ければ昼が訪れる，という規則正しい太陽の運行を natural と捉え，これに反する今の状態は‘unnatural’であると考えら

れている。「時間」が正常に流れていないかのようである。

'the deed that's done' 即ち，国王暗殺が 'unnatural' であるのは当然の事とみなされている。事実の解明は未だなされておらず，Old Man が事の成りゆきをどこまで知っているのかも定かではないが，事実の多くを知る者にとっても，やはりそれは 'unnatural' でしかない。

事を為すにあたって，Macbeth は考えた。Duncan 王は，自分にとって身内（'cousin'）であり，主君である。しかも，今は自分の館に逗留する客でもある。暴君ならばともかく，Duncan 王は名君といってもいい王者である。これらのどれ一つをとってもその一つの理由のためにこの王を敵から護るのが当然であり，これに反して王を弑逆すればその行為には弁明の余地は無い。当然為して然るべき事が natural であり，これに悉く反した Macbeth の行為は，だから 'unnatural' ということになる。

加えて，この事件は Macbeth が自分の「未来」を無理に「現在」に引き寄せて，Witches の予言を自らの手で実現させたという，もう一つの側面を隠している。natural な「時間」の流れを乱したという意味でも 'unnatural' であった。

途中から会話に加わった Macduff によると，Duncan 王殺害の主謀者は，二人の王子であるらしいという。それが事実とすれば，これほど 'unnatural' なことはないと，Ross は思う。

'Gainst nature still! (II. iv. 28)

親子の情愛に逆って父親を殺害したのであるから，そういう意味で，''Gainst nature'（nature＝natural feeling＝親子の間に当然あるべき情愛）であるが，王位継承者と定った王子が，その順番を待てずに王位を奪おうとした，というのだから，これは，待ち時間を短縮させ物事の順序を乱したという事になる。そういう意味でも ''Gainst nature'（＝un-

natural）であった。

このように事件直後から，誰の心にも何か腑に落ちない思いが宿ったが，ともかく Macbeth は，Witches の予言通り王位を手に入れた。

ところで Macbeth についての予言はここまでで，Macbeth の王位は代々，Banquo の子孫に受け継がれていくという。

荒野で Macbeth と一緒に Witches の予言を聞いた Banquo の反応は，終始 Macbeth と異っていた。一方が予言を受けてすぐに夢中になるのに対して，もう一方は「人間を破滅させようと地獄の手先が真実を言うことがある」(I. iii. 123-126) と，まるで Hamlet のような用心深さをみせる。それでも自分の「未来」を知りたくない訳ではない。

> If you can look into the seeds of time,
> And say which grain will grow and which will not,
> Speak then to me, ... (I. iii. 58-60)

'seeds', 'grain', 'grow' と，これから生じるであろう事柄を，Banquo は植物の image で捉えている。

植物は，人間の手を離れて自分で育つ力を持ち，時間と共にその成長がある。しかも，時間の流れは一定の方向で，決して逆行することがない。

子孫が王となると予言されても，Banquo は何の変化もみせなかった。

Duncan 王の城に帰り着くと，Macbeth と Banquo の二人は，王の讃辞を受ける。

> Dun. ...
> I have begun to plant thee and will labour
> To make thee full of growing. ... (I. iv. 28-29)

王のこの台詞には，二人の忠実な家臣を植物を育てるように労力と時間をかけてこれからゆっくり育てていこうとする気持が込められている。

これに答えたのは Macbeth ではなくて，Banquo であった。

Ban. There if I grow,
The harvest is your own. (I. iv. 32-33)

Duncan 王の言葉に沿って，Banquo らしい答え方をしている。Duncan 王と Banquo の代表する世界では，(Macbeth も予言を聞くまではそうであったに違いないが)「時間」は，植物の育つ速さで計られ，そのリズムに合わせるように，人間も生きている。

そういう Banquo も全くの無欲という訳ではない。Macbeth の受けた Witches の予言を一緒に聞いた Banquo には，Macbeth がどう取り繕おうと，Duncan 王殺害の真犯人が Macbeth であることはとうに察しがついている (III. i. 1-3)。その同じ Witches が，歴代の王位は Banquo の子孫のものと保証してくれたのであるから，そこに希望が無い訳ではない (III. i. 3-10)。しかし，「時」の満ちるのを待とうとでもするかのように口をつぐんだ Banquo (III. i. 10) にとって，Macbeth は，適(かな)う相手ではなかった。Macbeth は既に，次の布石を考え始めていたからである。

To be thus is nothing;
But to be safely thus. (III. i. 47)

自分の手を汚してせっかく手に入れた王位であるのに，いつ何時 Banquo によって奪われるか知れない。「現在」につきまとうこの不安の故に，Macbeth は王位に即いたその時から，予言に逆うよう行動し始める。

... come fate into the list,
And champion me to the utterance! (III. i. 71-72)

試合の相手は 'fate' である。Banquo とその子孫に王位を奪われない

ためには，前もって彼らを亡き者にしておけばよい。自分が王位に即くまでは味方であった‘fate’に戦を挑んだ Macbeth は，自ら‘fate’を作り出すつもりでさえいる。

Fleance his son, ...
... must embrace the fate
Of that dark hour. (III. i. i. 135-138)

二人の murderers に Banquo と Fleance を殺す仕事を，Murderers 自身が受けた仕打ちの報復として行うことを納得させる Macbeth は，Laertes に Hamlet が仇であると納得させる場面の Claudius を想い出させる。Duncan 王殺害の際には，Lady Macbeth の精神的支えと，彼女の考える具体的手順と，実際上の手助け無しには実行できなかった Macbeth が，ここではもはや「立派に」独り立ちして，自分の身を護るための対策を講じている。Lady Macbeth は，Macbeth がこれからしようとしている企さえ知らされていない。(III. ii. 8-12)

しかし，精神的には傍目にもそれと解るほどの‘fancies’(III. ii. 9) に悩む Macbeth であった。

自分の手で，Witches の予言を実現させたが，早々と手に入れた「未来」が「現在」になってみれば，その「現在」は，予言の残りの半分に脅かされて，無（‘nothing’(III. i. 47)）に等しい。Banquo の子孫が歴代の王となるという「未来」は，恐しい夢（‘terrible dreams’(III. ii. 18)）の形をとって Macbeth の眠りを妨げている。

「花を装い，その実，花の蔭に身を隠すへびであれ」（‘look like the innocent flower, But be the serpent under't.’ (I. v. 66-67)）と，Macbeth に言いきかせたのは Lady Macbeth であった。そしてその時は，Macbeth 自身が‘serpent’であった。ところが今や状況は一変した。Macbeth が襲いかかった当の相手が‘snake’(III. ii. 13) となった

のである。しかも，その‘snake’は傷を負った（‘scotch'd’）が，死にきっていない（‘not kill'd’）。傷が癒えればいつ自分に向ってくるか知れない。これからの事を考えると Macbeth の心は，蠍（‘scorpion’(III. iii. 36)）でいっぱいになってしまう。

Duncan 王殺害の時に暗い夜に呼びかけたのは Lady Macbeth であった (I. III. 51-55) が，今は Macbeth 自身が，自分の代りに，Murderers が Banquo と Fleance を殺してくれる夜が速やかに訪れるよう呼びかけている (III. ii. 46-53)。そして，そういう恐しい夜への祈りには，必ず Hecate の名が顔を出す。

Banquo は殺害されたが，Fleance は逃げのびた。Macbeth は‘fate’を作り損なったのである。

二人の殺害の成功に期待をしていた Macbeth にとって，Fleance 逃亡の報告は痛かった。‘the grown serpent’（=Banquo）(III. iv. 29) は死んだが，肝心の‘the worm’（=Fleance）(29) は生きている。ただ，逃げた‘worm’が‘venom’を持つようになるまで，当分の間は安全か，とも思い直す。

‘serpent’, ‘snake’, ‘scorpion’, ‘worm’, ‘venom’, Macbeth の心を怯やかすこれらはすべて，Witches の cauldron の中に入れられるものと同類である。Witches の世界が，Macbeth の心の世界をそれほど深く侵しているということであろう。

Murderers から仕事の報告を受けたのは，Macbeth が王位に即いて初めて催した宴の席での事であった。Fleance の存在は気に懸るが，ここしばらくは Witches の予言を忘れていられそうだと，少し安堵する Macbeth が，客の前で Banquo の欠席を惜しむ言葉を口にした途端 (III. iv. 39-40)，当の Banquo の Ghost が会場に現われて，Macbeth を驚愕させる。

「未来」の王位を護るために殺した Banquo は，Macbeth にとって，

もはや「過去」の存在となっていたはずである。Duncan 王の寝所へ導いた 'the air-drawn dagger' (III. iv. 62) が，これからしようとする 'bloody business' のもたらしたものである，と思いなす事ができた Macbeth も，Ghost の形で立ち現われた「過去」の恐しさに，客の前であることも忘れて取り乱す。

作り損った 'fate' のもたらす「未来」の 'imaginings' に怯え，死からさえ甦る「過去」の 'horrible shadow' (III. iv. 106) に不意を打たれて，Macbeth の「現在」は，更らに悪い状態となった。

せめて「過去」だけでも昔（'the olden time' (III. iv. 75)）のようであったらよかったのにと，Macbeth は「過去」に苦しめられる「今」を嘆く。こうして，Macbeth の「時間」は，「現在」に，「未来」と「過去」が現出する chaotic な 'restless ecstasy' (III. ii. 22) の連らなりとなってしまったのである。

祝宴は失敗に終った。Lady Macbeth のとりなしで，Macbeth にしか見えない Ghost の存在は客に知られずに散会したが，周囲の者の抱く Macbeth に対する疑惑は，野火のように広がり始めている。

先づ Macduff は，招待されていたにも拘らず祝宴に欠席して，Macbeth の心に棘のように突き刺さった。(III. iv. 128–129)

こうした動きを見せ始めた Macduff は，今までの予言に無いこれからの行く末を Macbeth に思案させる。これからの行動の手掛かりを得に 'the weird sisters' (III. iv. 133) の所へ行こうと Macbeth に思いつかせるのはそのためである。

始めてしまった殺戮に，引き返そうにも渡ってしまった方が楽なほどはまり込んだ (III. iv. 136–138) と感じる Macbeth は，後はただ闇雲に前進するしかない，と 'tyrant' (III. vi. 22) の様相をみせ始める。頭に浮かんだ事は，その良し悪しの判断を待たず，即，実行に移さなければならない (III. iv. 138–139)。恐怖に怯える病んだ神経は，実行にかけては自分

がまだ未熟なせいである (III. iv. 144) と，Macbeth は思おうとしている。

自分の方から Witches のもとへ赴いた Macbeth は，予言を与えてくれるなら，陸上であろうと海上であろうと，破壊の限りを尽してもかまわない (IV. i. 52-60) と Witches に迫る。

同じ Witches の予言でありながら，一幕三場の最初の予言と，今度のそれとでは，内容に質の違いがみられる。前者では，実際に起こり得る事柄を内容として予言がなされたのに対し，後者では，四つの予言のうちの二つ，「女から生まれた者に Macbeth は倒せない」，「Birnam の森が Dunsinane に移動するまでは Macbeth は安全である」は，人として女から生まれない者はおらず，根を張った木々が大挙して移動する事はない，という普通自然界では起こり得ない事柄が条件として含まれている。

「Macduff に気をつけろ」という第一の予言は，既に Macbeth の心に恐れとして在ったものである。これによって Macbeth は，自分の恐怖が正しいものであったという確信を得る訳だが，第二の予言「女から生まれた者云々」を聞くと，二つの予言の間にある矛盾の元をたどろうともせず，安易に吉兆として受け容れてしまう。ただ，Macduff を，先手を打って殺しておいた方がよさそうだと思いはするのだが，時すでに遅しであることを今は未だ知らない。

第三の「Birnam の森云々」については，Macbeth はこれを，これからの安泰を保証されたようなものだとして喜んで受け容れる。

Banquo の子孫が王となるという予言は，依然として生きていた。Banquo 殺害は全くの無駄事であったようである。Banquo は Macbeth に殺害されることによって，彼自身の予言は成就されたと言う事ができよう。そうなると，彼の子孫云々という予言は，いよいよ確実らしく，Macbeth を苛立たせる。

Witches の姿が消えてすぐ，Macbeth が外で待つ Lennox から受け

た第一報は，Macduff のイングランド亡命であった。これは，これまで「未来」を先取りし続けて来た Macbeth が喫した最初のおくれとなった。

> Time, thou anticipatest my dread exploits:
> The flighty purpose never is o'ertook
> Unless the deed go with it: (IV. i. 144-146)

Duncan 王殺害を思い止まって，「時」に成りゆきを委せようと思った時，Macbeth にとって「時間」は，そこに生起する事柄に全く無関心に流れ続けるものであった。Duncan 王を殺害し，Banquo を亡き者にした今，Macbeth は 'fate' を完全に自分のものとするためには，「時間」こそが真の競争相手であったことを知るのである。

Macbeth が「時間」と競争するのは早さである。Macduff に先を越された Macbeth は，Fife の城を襲って Macduff の一族を皆殺しにする (IV. ii)。これを手始めに，誰彼かまわず殺害し，そのテンポは，日毎 ('each new day a gash Is added to her wounds:' (IV. iii. 40)) から，一時間毎どころか毎分おき ('That of an hour's age doth hiss the speaker: Each minute teems a new one.' (IV. iii. 176)) へと，速まっていく。

そういう母国の惨状をイングランドに亡命している Malcolm と Macduff に報告して，Ross は言う。

> ... good men's lives
> Expire before the flowers in their caps,
> Dying or ere they sicken. (IV. III. 171-173)

Macbeth の行動は，帽子に挿した花の萎れる時間で計られている。Duncan や Banquo の台詞にみられた植物の image はここに血脈を保っていたのである。

一族郎党を皆殺しにされて悲しむ Macduff に，Malcolm はイングランド軍と共に戦って祖国を救うことを誓う。

Macbeth
Is ripe for shaking. (IV. iii. 238)

「時」が満ちて果実が熟し，枝を揺すれば落果する。Macbeth はそういう熟した果実の image で捉えられている。Macbeth に植物の image はふさわしくないと言うのは，Macbeth の台詞の 'snake' や 'worm' がそれを与えられた者にふさわしくないというのと同一である。いずれの場合もそういう image を使う側の精神状態，心象風景をそっくり表わしている。

空間と時間のバリアを超えた存在である Witches を一方に置けば，反対の極に，「王の病」を癒し予言の力を持つというイングランド王 Edward (IV. iii) が，配されるだろうか。共に人間の力を超えているが，人間にとって幸福をもたらすか，不幸をもたらすかで対照をなしている。

あれほど気丈であった Lady Macbeth は，Macbeth が 'tyrant' となるのと反比例するかのように，精神を病み，夢遊病者となって我々の前に姿を現わす。意志のコントロールが利かない眠りの状態で，Lady Macbeth は，医者と侍女に聞かれているとも知らず，Macbeth が犯した Duncan 王，Banquo, Lady Macduff（と，その子供達）の殺害の事実を口にする。Macbeth と Lady Macbeth の精神状態がどのように逆転したかは，Lady Macbeth の次の台詞に明らかである。

Out, damned spot! out, I say!—
...
What, will these hands ne'er be clean?
...
Here's the smell of the blood still: all the
purfumes of Arabia will not sweeten this little

hands. (V. i. 39, 48, 56-58)

Macbeth はここから出発し，Lady Macbeth はここに到った。

... unnatural deeds
Do breed unnatural troubles: (V. i. 79-80)

Lady Macbeth の様子を診ていた Doctor は，こう呟く。'unnatural deeds' は，先にあげた Old Man の台詞の中での使われ方と同じである。Banquo 殺害も，Lady Macduff（と，その子供達）の殺害も，元を糺せば Duncan 王殺害という 'unnatural deed' (II. iv. 10) のもたらしたものであるからである。

'unnatural troubles' については，同じ Doctor の直前の台詞が説明している。

A great perturbation in nature, to receive at once
the benefit of sleep, and do the effects of watching!
(V. i. 10-12)

'nature' は，人間の心と体であり，その正常な働きのもたらす正常な状態である。そこに乱れが生じ，眠りと覚醒が本来のあるべき状態を逸脱している。順番に来て然るべきものが，両方同時に起っている。

夫の「未来」を先取りするという 'unnatural deed' の共犯者であった妻は，眠りの中で夢の形をとって現われる「過去」に復讐されて，自らの命を絶つことになるのである。

王子 Malcolm を擁立するイングランド軍との決戦を前に，味方は逃げ敵は数を増していく。Macbeth は，勝ち目は無さそうであると考える一方，Witches の予言を最後の拠り所としている。

戦の支度をしながら Macbeth の口を衝いて，来し方とそれのもたらした今のみじめな状態を悲しむ言葉がもれる。(V. iii. 22-28)

I have lived long enough: my way of life
Is fall'n into the sear, the yellow leaf;
... (V. iii. 22-23)

不思議な事に Macbeth はここで，充分に長く生きたと感じている。それは時計で計られる時間の長さではない。これまでに繰り返し行ってきた残虐な行為の数々が Macbeth にそう言わせているのは確かであって，「未来」を先取りし，「時間」と早さを競ってきた Macbeth には，その間の「時間」が不当に長く感じられているという事であろう。

加えて自らを 'yellow leaf' という植物の image で捉えているのは，これまでの Macbeth になかったことである。

束の間であれ，Macbeth はこの時，順当に年齢を重ねて到る老年の有り様を，そう生きてこなかった自分のそれと重ね合わせているようである。

しかし，そうする事は，却って自他の相違を Macbeth に想い起こさせることにしかならなかった。本来ならあって然るべき，'honour', 'love', 'obedience', 'troops of friends' (V. iii. 25) の代りに Macbeth に残されたものは，'curses' であり，'mouth-honour' (27) でしかない現実を Macbeth は暗然とした思いで認めている。

それからほどなく Lady Macbeth の死の知らせが Macbeth のもとに届く。それを受けて答える Macbeth の台詞には，Macbeth があの 'blessed time' を断ち切った後，生きて得た人生観のすべてが集約されている。

To-morrow, and to-morrow, and to-morrow,
Creeps in this petty pace from day to day
To the last syllable of recorded time,
And all our yesterdays have lighted fools
The way to dusty death. Out, out, brief candle!

Life's but a walking shadow, a poor player
That struts and frets his hour upon the stage
And then is heard no more: it is a tale
Told by an idiot, full of sound and fury,
Signifying nothing. (V. v. 19-28)

「時間」の経過は，'to-morrow' の揺るぎない歩みとして捉えられている。'to-morrow' の行き着く先は，それぞれの人間の死であり，そこでそれぞれの「時間」はぷっつりと，切れている。

「時のこちら側」(I. vii. 6) で Macbeth は，時が満ちて 'fate' が自然と成就する前に，自分の意志と力で 'fate' を完成させようと，あるいは 'fate' を変えようとして，生き急いだ。

「時間」の流れに身を浸している間は，時の歩みがまるで這うようにのろのろと（'creeps in this petty pace' (20)）感じられていたのが，人の死（Lady Macbeth の）に遇って，改めて人間の一生を振り返れば，それは，ろうそくの灯（'brief candle' (23)）ほどのはかない「時間」であったことが解るのである。

Macbeth は又，自分の人生を客観的に振り返る機会を得た。'to-morrow' ばかりを追いかけて心の休まる間のなかった Macbeth が，今初めて立ち止まると，残り少なくなった 'to-morrow' の先行きに比べて，'yesterdays' ばかりがやたらあることに気づくのである。その 'yesterdays' は生命を失っていて，'creep' することはしないが，連続して並んでおり，その先には 'dusty death' (23) の影がみえている。

Witches の予言に操られた Macbeth の生涯は，正しく，演じることを課せられた「あわれな役者」（'a poor player' (24)），「生きた影法子」（'a walking shadow' (24)）にすぎなかった。

「現在」が 'nothing' (III. i. 47) であれば，その連なりの人生は，'Signifying nothing' (28) と感じられもしよう。

嘗て‘blessed time’を享受した Macbeth は，ここに到ってもう何の名残りも留めてはいない。それでも自己を見つめる Macbeth の明瞭な意識と，正確な認識とがこの台詞に思いがけない普遍性を与えている。

Birnam の森は，Macbeth が信じたように，大地に根を張ってびくともしなかったが，イングランド軍の兵士たちの数のカムフラージュに使われた木々の枝は，遠目に森が移動すると見え，女から生まれたには違いないが，Macduff は月足らずで帝王切開で取り出された子供であった。

Witches の言葉の本当の意味を知った Macbeth は，意気沮喪し，勇気も失せて，予言通り Macduff に討たれて死ぬ。

Macbeth を討った Macduff は Malcolm に報告してこれを知らせる。

... the time is free: (V. ix. 55)

今や我々は（「時間」は）解放された。「時間」の自由を Macbeth は奪っていたのである。

スコットランドに正常な「時間」の流れが戻った証は，正統な王として位に就いた Malcolm の王としての所信の表明に表われている。

We shall not spend a large expense of time
Before we recon with your several loves,
And make us even with you.
...
What's more to do,
Which would be planted newly with the time,
...
We will perform in measure, time and place:
(V. viii. 60–75)

「時を逸せず」論功行賞を行い，「時と共に」為すべき事に着手し，「折り

をみて，適宜に」必要な事を実行していこう。

この16行に及ぶ台詞に‘time’という語が3回使われていて，そのいずれもが，Malcolm の，父王 Duncan から受け継いだ志を表わしている。「時」と歩調を合わせ，おくれず急がず国を治めていこうとする王の誕生である。

こういう王の治めるスコットランドが，この後長く安定した王国として栄えていくであろうことを我々に確信させて，*Macbeth* の幕は降ろされる。

それにしても，こうしてそれぞれの「固有時間」を辿ってみると，それが，それぞれの人物の生き方そのものである事が解ってくる。文学に於る時間の考察は，こんな風に Shakespeare によって血肉化されたということであろう。

コペルニクスに遅れること百年，Shakespeare は，ガリレオと同じ年に生まれている。中世神学の世界がルネッサンスへと移行し，学問も芸術も新しい息吹に満ちていた頃である。それでも力学を初めて体系づけたニュートンが生まれたのは，Shakespeare 没後26年目，ガリレオの没年の事であった。

ニュートン力学に於る「絶対時間」は，「外界の何ものとも関係なく均一に流れる」と定義されている。この「絶対時間」が疑われ，「固有時間」の概念がアインシュタインによって導入されるまでには，それから約二百年を要した。

「物体の速度が光速に近づけば，時計はそのリズムを変える」，「異った時刻に生起する異った事象の順序は，観測者によっては同時であったり，逆転しさえする」と，アインシュタインは，それまでの時間論に大きく変更を迫る理論を立証した。そしてそれを証左する物理学的発見も少なから

ずなされている。

勿論，将来これを上まわる包括的理論が提唱される可能性は，充分に残されている。

とは言え，そういうごく最近の時間論を知り得る現代の筆者が，今から約四百年前に書かれた *Macbeth* に描かれた「時間」を，何の抵抗もなく受け容れることができる事に，今更らのように驚いている。